

『海人の刈藻』私見

妹尾好信

はじめに

中世物語『海人の刈藻』は、原作本が平安末期に作られ、現存本は鎌倉後期以降に改作されたものと一般に考えられている。原作本は早くに散逸しているが、『明月記』貞永二年（一二三三）三月二

〇日の条や、『和歌色葉集』卷三・増補物語名の部にその名が見え、『無名草子』にはかなり詳しく内容に関する言及がある。また、『拾遺百番歌合』に三首、『風葉和歌集』に四首の歌が採られ、重

複歌を除いて五首の作中歌が知られている。

原作本から現存本への改作の問題をはじめ、本物語の特質や主題に関しては、近世末期の黒川春村『古物語類字抄』での言及を嚆矢として、昭和十年代の森岡常夫・宮田和一郎氏らの研究を土台に、以後半世紀ほどの間に、桑原博史・小木喬・樋口芳麻呂氏ら、多くの研究者によってさまざまな論究がなされて来た。とりわけ近年は中世物語研究の気運が高まり、その一環として本物語に関する研究成果も次第に多く世に出されるようになった。本稿では、それら諸先学の学恩を蒙りつつ、本物語について若干の私見を述べてみたいと思う。

一、書名とその意味

「海人の刈藻」という本書の題号は、諸説一致して、『古今集』卷一五・恋五・八〇七に見える歌、

（題しらす）

典侍藤原直子朝臣

あまのかるもにすむむしの我からとねをこそなかも世をばうらみ¹⁾

に掬つているとされ、これにより「我と我が身を嘆く恋の謂い」などと言われる。が、これは、この歌の歌句を直接取って書名としたものではなく、この歌を引歌として用いた本物語の本文中の一節によって書名としたものと理解されている。すなわち、卷三に、

日に添へていや増しなる水の白波を、みな心落ち居て、「嬉し」

と思しわたるに、かの下燃えに思ひ乱るる人の御心、いかばかりならん。ふみわたるべき浮き橋も絶え果ていとどつらけれ

ば、「来ん世の海人となりてかづくみるめを」と思し取りぬるにも、いとど袖はひちまさりて、海人の刈る藻に住む虫のわれ

からつらき人多く嘆きわびたまふ。（二六二頁）

とある記事に拠るとされるのである。これは、新中納言に密通され、

秘密裡に出生した藤壺の女御が宮中に戻った後、日増しに帝寵が厚くなるのを聞いて、文を通わすてだでもなくなつた中納言が悲嘆にくれ、現世での逢瀬を諦めて来世での再会を期待しつつも、我が心から引き起こした事態を恨んでいる場面である。

「水の白波」は、『古今集』卷一四・恋四・六八二の詠み人知らず歌「いしま行く水の白波立帰りがくこそは見めあかずもあるかな」を引いて、帝の女御への飽きることのない寵愛の深さを言い、「来ん世の海人となりてかづくみるめを」は、『古今六帖』第五・「こんよ」・三・三〇・作者不記「このよにて君を見るめのかたからはこんよのあまとなりてかづかん」を引いて、この世での逢瀬を諦め後世での再会を願う気持ちを表わしている。そして、「海人の刈る藻に住む虫のわれから」の部分には、前記の「古今集」八〇七番歌を引いて、自らの行為ゆえにつらく当たる人が多くなつたことを嘆いているさまが述べられる。その他、「下燃えに思ひ乱る」とか、「ふみわたるべき浮き橋も絶え果てて」とかも、極めて和歌的な技法による表現である。

このように、この部分は引歌表現を駆使し、和歌的装飾がちりばめられ、物語中でも特に技巧の目立つ印象的な文章であり、ここから新中納言の悲嘆を象徴する語として、「海人の刈藻」という書名が取られたというのは、いかにもふさわしいように思われる。

しかしながら、翻つて考えると、かくも多くの引歌表現が用いられた中から、特に「海人の刈藻」の語だけを取り上げて書名とする必然性はどこにあるのかという気もしてくる。物語本文中の語句から書名を付けるのなら、この部分以外にも、他にいくらか候補はあろう。それに、「我からとねをこそなかも世をばうらみじ」という

この「古今集」八〇七番歌の意を含ませて本物語全体の題号とするのは、いささかそぐわないのではないかと思われる。「こんなつらい思いをするのも自分のせいなのだ。ただ声をあげて泣こう。人のせいにして世間を恨んだりはそのまい」というこの歌の歌意は、本物語における新中納言の思いを代表させるにはどうもふさわしくない。その点を気にされたのか、室城秀之氏は、直前の「来ん世の海人となりてかづくみるめを」の部分の意味も合わせ考えて、「新中納言の自らまねいた「つらき」心をかたどるとともに」「この世では添いとげるのできない女御との、「来む世」での邂逅を期待しつつ、「世をば恨」まずに出家しようとの新中納言の思いを内にひそめている」と本書題号の由来を説かれるのであるが、少々苦しいように思う。物語の展開から見て、新中納言の思いとしてはむしろ出家願望の方が重要であり、この部分の言葉の中では「来ん世の海人となりて」云々の方に重きが置かれるべきではなからうか。

どうも私には、本物語の題号としては、必ずしも巻三のこの部分の表現ばかりにとらわれずに、広く典拠を求めた方がよいように思われる。その意味で、一般的に「海人の刈る藻」という歌語が導くものとしての「われから」という語によって表現される宿世観を象徴した題号だと考えられる国谷（現姓守口）暁美氏の見解なども参考になるであろう。

私としては、本物語を新中納言の藤壺の女御に対する悲恋と出家遁世の物語と見た時、物語全体をシンボライズする書名には、やはり恋の苦しみとそれによる出家願望とが反映されていると見るべきであろうと思う。その点、「古今集」八〇七番歌では、恋の苦しみに限定されてしまう。

そこで両者を包含した内容を有し、かつ「海人の刈る藻」の語を含んだ歌を著名な歌集に求めると、次の「古今集」巻一八・雑下・九三四番歌が最もふさわしかろうと思う。

(題しらず)

(読人しらず)

いく世しあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる

この歌は、雑部下の第二首目にあり、部立上は恋歌ではない。しかし、「みるめ(海松布)見る目」「うら(浦)憂・恨」などの語と縁の深い「あまのかるも」の語には十分に恋の情緒が感じられ、「思ひみだるる」にも恋愛のイメージが強い。そして、「いく世しあらじわが身を」という表現にこめられた無常観は、仏教的香気を持ち、出家願望に通じるものである。

本物語巻三で、初瀬に参籠した新中納言の夢に現れた僧が、「まことにかりそめの世に侍り。しばしも滞らんほどだに、後の世の勤めしたまへ」(二四七頁)と悟し、これによって「山道も急がるるにや」(二五〇頁)と出家願望を強くする。この夢の告げが後の出家遁世に至る端緒となるわけで、物語展開上の大きな節目になっている。

さらに、巻四では、一条院の自室で寝た新中納言の夢に同じ僧が現れ、「塵をだに」と言っとうち仰ぎ、「一切有為法、如夢泡影、如露亦如電」と「金剛般若経」の偈を誦する。「塵をだに」は、「古今集」巻三・夏・一六七・躬恒「ちりをだにすゑじとぞ思ふさきしよりいもとわがぬるとこ夏のはな」の歌の初句を引いたもので、「床夏」「撫子」、すなわち幼な子を纏と感じてなかなか出家に踏み切れないでいる新中納言の状況を表わしたものであり、偈の内容は、

一切の存在が変転してはかないものであることを悟したものである。新中納言はこの僧の言葉に感じ、「さればよ、まことに世のありさま定め難く、ほどなき身にいつまで」と心あはたたく、仏の諫めも嬉しく、「さすがあはれも多く絆ある心地するを、心汚しと見たまふらん」と思つて(二一八三頁)出家の決意を固めるのである。

これが新中納言の出家遁世の直接的契機であり、言うまでもなく、この場面は物語の構想上、非常に重要な場面である。

この両場面における新中納言の心情、また夢に現れた僧の悟しは、まさに「古今集」九三四番歌の内容に一致していると言つてよいのではなからうか。思うに、「海人の刈藻」という本物語の題号は、恋しい人あるいはいとしい子のためになかなか出家に踏み切れないでいる新中納言の心中の苦悩、出家願望と恋愛のはざまにたゆたう心の動揺のさまを、「古今集」の古歌によって表現したものである。そして、それこそがこの物語のひとつの主題を表わしていると思うのである。

本書の題号は、主に「古今集」九三四番歌に拠つたものであつて、巻三に引歌として用いられた同書八〇七番歌とは直接的な関係はない(もちろん間接的な関連は考えられるが)。巻三に八〇七番歌が引歌とされていることと題号の由来とは別々に考えるべきであろうと思う。それに、原作本にも八〇七番歌が引歌として用いられていなかどうかもわからないのである。ただ、本書の題号が原作本の作者自身によって付けられたことは確かであろうと思われるのである。

二、改作の意図と方法

次に、原作本の改作についての問題を考えたい。

現存本「海人の刈藻」が「無名草子」や「拾遺百番歌合」・「風葉集」の編者が見た本とは別の本であることは明らかであり、これらの成立以後に改作されたものと考えるのが通説である。逆に現存本は原作の草稿であり、散逸した本がそれを修訂した定稿本であると見る小木喬氏⁶のような説もあるが、大方の賛同を得るには至っていない。私も通説に従い、現存本は鎌倉中期までは存在していた古本を、以後何らかの意図で改作したものであると考えることにする。

その改作の方法については、まず、現存本の内容が「無名草子」の記事や「拾遺百番歌合」と「風葉集」の詞書によって知られる原作本の内容と大きな違いがなく、物語に描かれる事件や人物関係の設定がほぼ一致し、主要な登場人物の呼称や官職名にも変更がないことから、現存本は原作本の筋に相当忠実に改作したものと考えられるということが指摘されている。

そして、もうひとつ明らかなのは、「拾遺百番歌合」と「風葉集」に採られた五首の歌が現存本には一首も存在しないということである。

このことに関しては、現存本は原作本を相当大幅に縮小・簡略化したものであるゆえ、歌数もいきおい減少し、五首とも現存本には残らなかったとする考えもあるが、「拾遺百番歌合」や「風葉集」に採られた歌は、物語中の代表歌とも言うべき秀歌であろうから、簡略化ゆえにそれらがすべてカットされたとは考えにくい。

そこで、改作に関しては、意図的に、「原作の歌を全面的に詠み替えていくという改作の作業が行われ」たと考える塩田公⁸子氏のような見解が出て来る。塩田氏はまた、「拾遺百番歌合」と「風葉集」に見える五首の歌が存在したとおぼしい箇所⁹の現存本の記事を検討

されて、「歌のみを非常に巧妙に取り払い、歌の入りうる情況のみはすっかり残し、和歌を取り去った跡をうまくくすすようにその周辺に「手直し」ともいふべき改変が行なわれたらしい」と述べておられる⁹。

言われる通りで、どうやら本物語の改作に際しては、和歌の挿し替えや除去、または新作の挿入などがひとつの眼目であったらしい。「拾遺百番歌合」や「風葉集」によって物語中の秀歌が認定された後においては、両書に採られた五首の歌がすべて削除されているというのは、この五首だけを意識的に除いたというわけではあるまい。おそらく改作者は、基本的に作中の和歌をすべて新しくすることを念頭に置いて改作を試みたのであらうと思われ、塩田氏が「和歌を全面的にさし変える為の改作作業であつたのではないかと想像する」¹⁰と言われているのも納得がいく。

物語の改作と言えば、よく梗概化・簡略化という面でのみ考えられがちであるが、必ずしもそうとはばかりは言えない。「源氏物語」はあまりの大長編ゆえ、中世以降にさまざまな梗概書が作られた。「夜半の寢覚」の場合も梗概化の線で改作本が作られている。が、たとえば「とりかへばや物語」は、明らかに簡略化ではなく、筋の展開や文章表現上の露骨さをやわらげるのが目的であつた。

「海人の刈藻」の改作者は、筋そのものを改めることを目的にしてはいなかった。彼の関心は、散文作品としての物語の改作ではなく、物語中の和歌の体系を組み替えるというところにあつた。おそらくは歌よみとしての詠歌修業の一環としてこのような作業を試みたのではないであらうか。もし物語の筋を改作することに関心があれば、「無名草子」が指摘している本物語の難点をほぼそのままに

しておく筈はないであろうと思う。たとえば、藤壺の中宮の一の宮
出産の折の仏の数が多すぎるといふような難点は容易に解消できた
であろうのに、そのままになっていると見られるのである。改作者
が「無名草子」の評を知らなかった可能性がないわけではないが、
それにしても「無名草子」の伝える原作本の筋と現存本のそれとは
あまりに近すぎよう。もつとも、和歌を全面的に挿し替えることに
伴って歌の前後の記事には省略や改変がなされ、結果的に筋の細部
において変化が生じることはままあった（たとえば、新中納言の出
家の途次での江侍従の従者との遭遇場面の省略など）。しかし、あく
まで物語の筋には手を加えないという原則的な姿勢は貫かれている
と考えられるのである。

原作本と改作本との間に大幅に和歌が挿し替えられていると見ら
れる物語の例に「しのびね物語」がある。「しのびね物語」の場合、
「風葉集」に三首の歌が採られているが、それらはいずれも現存本
には存在しない歌である。現存本は古本を大幅に簡略化・梗概化す
ることによって成立したものと考えられているのであるが、両本の
間には微妙な筋の相違もあることが想定されている。この作品の場
合も、梗概化のほかに、「海人の刈藻」と同様、和歌の全面的な詠
み替えをひとつの基本方針として改作が試みられたものなのではな
いかと思われるのである。

三、改作の時期と引歌

次に問題となるのは改作の時期であるが、これについては、今の
ところ「風葉集」成立の文永八年（一二七二）以後ということしか
明らかではない。したがって、鎌倉後期あるいは南北朝期に入つて

からの改作としか言いようがないのであるが、成立時期を推定する
ひとつの手掛かりに物語中の引歌表現がある。

本物語の引歌に関しては、早く宮田和一郎氏が詳細に調査され、
その結果、本物語の作者を、「古歌を引くに極めて巧妙な技倆を示
して居つて、この一事を以てしてもこの作者は余程秀でた創作能力
を持つて居たやうに思ふ」と評しておられる。氏は「古今集」から
「新統古今集」まで代々の勅撰集から三三首の引歌を指摘された。
そして、そのうち「新千載集」巻一五・恋五・一六三八に載る次の
歌が最下限であるとされた。

題しらず

前參議雅有

まれにてもあひ見ばとこそ思ひしにたえぬは人のうらみなりけ
り
すなわち、「新千載集」成立の延文四年（一二五九）ないし作者飛
鳥井雅有（仁治二年（一二四二）〜正安三年（一二三〇））の生没を
もつて本物語の改作年代の目安とされたのである。

後年、樋口芳麻呂氏は、「新古今集」以後の勅撰集歌について、
宮田氏が引歌として指摘された歌を再検討され、やはり同じく「新
千載集」一六三八の雅有歌を最下限と認められた。ただしこの歌は
雅有の自撰家集「隣女和歌集」によれば正元二年（一二六〇）に詠
まれた三百首歌の中の歌であるから、必ずしも「新千載集」による
引歌と見なくてもよいことを述べておられる。が、結局氏は、現存
本「海人の刈藻」所載歌に「新千載集」所収歌の歌句と一致するも
のが目につくことから、現存本は「新千載集」の成立後まもなくの
頃の成立と推定されると言われている。

ただ、ここで私は、宮田・樋口両氏が改作時期推定の手掛かりと

された「新千載集」の雅有歌を引歌とする考えに疑問を表明したい。
当該箇所は卷二の後半部分に存する。按察の大納言家の長男宰相
の中將（もとの頭の中將）が、父の後妻の連れ子である故藤中納言
の中の君と密かに契つた翌日、遅ればせに送つた後朝の文の中の言
葉である。宰相の中將の文は、

逢坂の関のあなたの唐橋よ渡りてもなほ渡らまほしき

たへぬは人の（二三〇～一頁）

とあつた。この歌に添えられた「たへぬは人の」の語が雅有歌の第
四句を引いたものとされるのである。しかし、よく考えてみると、
この雅有歌は恋歌ではあるが、逢えないことを嘆く恨みの歌（いわ
ゆる「逢うて逢はざる恋」の趣き）で、仮にも後朝の文に引かれる
のはいかがかという気がする。「逢坂の」の歌は、昨夜念願かなつ
て逢うことができたが、今夜もまた逢いたいの意である。それに添
えられた「たへぬは人の」も、今夜再度の逢瀬を願う意の歌を引い
たものでなくてはふさわしくなからう。雅有歌ではいかにちぢは
ぐである。

そこで私は、この「たへぬは人の」は「後撰集」卷二・恋四・
八八二に載る次の歌を引いたものと見たい。

みくしげどのにはじめてつかはしける あつただの朝臣

けふそへにくれざらめやはとおもへどもたへぬは人の心なりけ
り

こちらは詞書から明らかに後朝の歌であり、今日に限って暮れな
い道理はないのだが、日が暮れてあなたに逢うのが待ち切れない思
いだの意で、まことにこの場にふさわしい。この敦忠歌は「大和物

語」第九二段にも載り、よく知られた歌である。これを引歌とした
表現に相違なからうと思う。諸本「たへぬは人の」と表記している
のも、雅有歌のように「絶えぬは人の」ではなく「堪へぬは人の」
であることを物語っている。これによって、宮田氏や樋口氏が引
歌の最下限とされた「新千載集」からは引歌が取られていないとい
うことになるのである（宮田氏がもう一首「新千載集」からの引歌
とされた卷一三・恋三・一四〇〇の花園院御製「しづむべき身をば
思はず涙川ながれて後の名こそをしけれ」については、樋口氏が言
われるごとく、物語本文の「流れて後の御名の苦しき」(二四七頁)
を必ずしも引歌表現と考えなくてもよいと思われるのである。

「新千載集」に引歌がないということになると、宮田・樋口両氏
の調査では、文永二年（一二六五）奏覧の「統古今集」が最下限と
いうことになるが、これは文永八年（一二七一）撰進の「風葉集」
以前であるから、結局本物語改作の時期は「風葉集」の成立後まも
なくの頃かと一応は考えることができる。

ところが、「新千載集」の卷一・恋一・一〇三九に、

百首歌たてまつりし時、寄風恋 二品法親王尊胤

しるべとはたのまずながら思ひやるそなたの風につてぞまたる
る

という歌があつて、これはあるいは本物語卷二の「例の新中納言殿
は、わかかへる思ひに、そなたの風もなつかしくて」(二三四頁)
云々とある部分の引歌であるかも知れない。尊胤法親王（徳治元年
一二三〇～延文四年一二五九）は後伏見院皇子で、「風雅集」
以下に入集する歌人である。この歌は「延文百首」六七一番に見え

る歌であるから、延文二年（一三五七）頃の詠と考えられる。もしこれが引歌と認められるならば、本物語は南北朝期の改作ということになり、つまりは樋口氏の説かれる通り、「新千載集」成立後もなくの頃と考えられるのであるが、いかがであろうか。

なお、「統古今集」より後の勅撰集の歌で、本物語の引歌となっている可能性が考えられるものとして、他に二首ほど挙げられる。ひとつは、「新後撰集」巻九・釈教・六八一番歌である。

久安百首歌に、釈教

大炊御門中納言

世の中をいとふあまりに鳥の音もきえぬ山のふもとにぞすむ
これが巻二の「中納言の、鳥の音聞こえぬ山道求めむもことわり
にこそと思し続けるに」（二一六頁）云々とある部分の引歌であるかも知れないのだが、この歌は詞書にある通り久安六年（一一五〇）成立の「久安百首」一八六番の歌であるから、改作時期の推定にはあまり役立たない。

もうひとつは、「統千載集」巻一九・哀傷・二〇六四番歌である。
（題しらず）
前大僧正源惠

夢の世をみてぞおどろくうつつにておくれさきだつならひ有り
とは

この歌を、巻四の「深くは思し嘆くまじきことなり。おくれ先立つならひつねのことにこそ」（二八七頁）とある部分が引いているかも知れないが、宮田・樋口両氏とも、ここは「新古今集」巻八・哀傷・七五七番に載る題しらずの遍昭歌「す系のつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」を引歌としておられ、言葉は源忠歌の方が近いけれども歌の知名度からは遍昭歌の方が有力か

と思われる。

四、本物語の特質と意義

さて、数ある中世物語の中で、本物語の特質と言えるものはいかなる点であろうか。

「無名草子」は本物語を「しめやかに艶ある所はなけれども、言葉遣ひなども「世継」をいみじく真似てしたたかなるさまなれ」と評している。言葉遣いが「世継」（おそらく「栄花物語」のこと）をひどく模倣して、しっかりしているというのであるが、これは単に文章表現の類似だけではなく、皇室・閥白家・按察の大納言家それぞれ三代にわたる年代記の物語で、いわゆる大河小説風作品である点をも指して言っているのであろう。本物語の文体上の特色としては、物語特有の文末助動詞「けり」の使用がほとんどなく、物語叙述の時制がつねに現在形をとっているという点が指摘されている¹⁶⁾。

物語の基本構造としては、新中納言（もと三位の中将、のち権大納言）の藤壺の中宮に対する悲恋の末の出家遁世譚で、これは、「しびね物語」「兵部卿物語」等、中世物語には珍しくないプロットである。出家後の即身成仏という展開は、当時としては新味があったのであろうが、後の「零に濁る」や御伽草子「天若御子」などに踏襲され、それ自身が特異な構想というわけではなくなっている。私は、本物語の内容上の特色として、悪役不在と主人公不在の二点を挙げたいと思う。

悪役不在というのは、文字通り、本物語には悪役あるいは敵役というべき人物が一人として登場しないということである。対抗勢力

であり政敵であるはずの関白左大臣（大殿）と右大臣が全く張り合う姿勢を見せず、それぞれの娘である中宮と弘徽殿の女御も互いに氣を遣いあつて対立の様子がまるでない。按察の大納言も、娘の入内が期待されても関白左大臣や中宮にすこぶる遠慮し、彼らにその心遣いを感じ謝されている。按察の大納言家内部においても、故北の方腹の子供たち（頭の中將と大君）と後妻の現北の方の子供たち（蔵人の少將・若君・中の君・三の君）との間は極めて円満で、とりわけ現北の方は人柄がすぐれており、継子をも決して分け隔てすることなくかきずき、腹違いの子供たちもうるわしい兄弟愛を見せている。また、一条院においても、大宮が二人の養子（新中納言と三位の中將、のち大將と新中納言）を心から愛し、二人の君だちも大宮を実母以上に慕つて、血のつながらない妹齋宮とも危うげの全くない円滑な関係を終始保っている。

そのほかの端役たちにも人柄に問題のある人物というのはいま見当たらぬ。あえて挙げれば、按察の大納言の三人目の北の方として後妻を迎えられた故藤中納言の北の方が、怒りっぽくて声が大きく、やや上品さに欠ける人物とされ、継子の宰相の中將（もとの頭の中將）が実子の中の君と通じたことを知って激怒し、中の君の女房侍従を打擲して追い出し、按察の大納言に詰め寄つて責めたりするなど、物語中異色の存在であるが、この人も根は好人物で、やがて宰相の中將を婿として認め、生まれた姫君を大いにかわいがるのであるから、欠点と言つてもほほえましい程度のものである。他に、朱雀院の後宮において、梅壺の女御（あるいは登花殿の女御とも）の母が心むくつけき人で、他の女御たちを呪咀して、宮中に入るだけで物の怪に苦しませているということが語られるが、どうもこれ

は風聞に過ぎないようで、どろどろとした後宮の人間関係が描かれるには至らないのである。本物語はこのように理想的な好人物ばかりで成り立っている。早く「無名草子」が、「関白殿・大將殿などの、おのおの清き北の方持ちたりと言ひながら、おのづから散る心なく、上の御はからちのさばかり美しきを、塵ばかりも思ひかけぬこそ、むげにさうごうしけれ」と、男君たちがそれぞれの北の方に満足しきつて、美しい妻の姉妹たちとの間に危険な関係のきざしも見せないのに不満を表明し、また三角洋一氏が、「善意あふれる人々の物語であることが欠点でもあつて」云々と言われるのもつともと言えよう。

しかしながら、作者がかくも悪役・敵役を完全に排し、現実離れたとも言える人格円満な人物ばかりの世界を設定したのは、おそらく明確な意図に基づいてのことであろう。敵役の存在によつてもたらされる緊張感やサスペンスを失つてもあえて描きたかつたものがあつたからだと思われる。

もちろん、善意に満ちた人々によつて構成されてはいても、本物語は貴族社会の理想像を描こうとしたものではない。それどころか、これは新中納言のかわぬ恋の果ての出家から往生に至る悲恋物語を核としているのである。すなわち、善意あふれる人々ばかりの世界で起こつた悲劇の物語なのである。となると、善人の中での悲劇、誰を非難することもできない悲恋物語というのがこの世にはあるのだということを作者は描きたかつたのではないであらうか。いかに理想的に見える人格すぐれた人々ばかりの中でも悲劇は起こりうるのだ、それが人の世というものなのだという主張を作者はこういう人物設定で表現してみたのではないかと思う。そうすると、善意

あふれる人々の物語であることは必ずしも欠点とばかりは言えないような気もしてくる。

また、本物語の巻二では、疫病の流行による主要人物たちの死が描かれる。善意に満ちた人々の世をも病魔は容赦なく襲い、人々に死別の悲しみを味わせるといふ人の世の厳しい定めを描いているようにも見える。が、もちろんこういつたことが作者の言いたかつたことのすべてではない。

さて次に、本物語が主人公不在の物語であるということであるが、このことはすでに室城秀之氏¹⁹が指摘されたことである。が、これには少し注釈が必要である。主人公不在というのは、必ずしも本物語に決定的に主人公が存在しないということではない。物語全体を通じての主人公は誰かと言えば、やはり一条院の新中納言（はじめ三位の中將、のち権大納言）ということになる。これは第一章に述べたように本書の題号が新中納言の苦惱を象徴したものと見られることから明らかである。

ところが、本物語はなかなかその新中納言の恋物語を語りはじめないのである。彼自身は物語の開始後まもなく登場する。しかし風に森岡常夫氏が言われたように、「中納言が中宮と交渉を持ち、始めて主人公としての位置を示すのは物語の半ばより僅か前にすぎず、それ以前は太政大臣・右大臣と同等もしくはそれ以下の人物であつて、将来に於ける中心人物たることは決して約束されていない²⁰」のである。これは王朝物語としては異常な主人公の扱いであろう。

開巻早々に語られるのは、時の関白左大臣の御曹子権大納言の素晴らしきである。関白家の一人息子で中宮の弟という申し分のない出自と将来性に加えて、若さと美貌、豊かな才学という卓越した属

性の設定は、物語の男主人公としていかにもふさわしい。こんな人物が日頃から関心を寄せていた按察の大納言の姫君たちをふとした機会に垣間見して恋の虜となる。これも物語の主人公たる男君ならではの行為である。その後、権大納言は按察の大納言の大君に激しく求婚し、父関白の力添えも得て、晴れて結婚を遂げる。

ここまで権大納言は恋物語の男主人公、また大君はヒロインの役目を花々しく担ったのであるが、意外にあっけなく結婚した後、二人はたちまち脇役に退いてしまうのである。そして代わって按察の大納言の中の君と一条院の新中納言（のちの大將）との関係にスポットライトが当てられるようになる。ここで読者はいささか意表をつかれた思いになろう。

新中納言は中の君に対する恋情を押さえ難く、七夕の日の夕暮れ、ついに中の君の居所に侵入し、強引に契りを結ぶ。その頃の君には中宮の仲介で春宮に入内する話が持ち上がっており、母北の方は心痛するが、この際に入内は諦め、新中納言と結婚させることを考えて、夫按察に勧めめる。新中納言方からは一条院の権大納言への働きかけもあつて、二人の結婚は認められる。ここでは、幼くして両親を失い、伯父の一条院に引き取られて育つた王族の薄幸の貴公子と、春宮入内が予定されていた将来の后がねの姫君との恋愛であり、物語の主人公としてはまたふさわしい組み合わせである。そしてその恋の成就は、男君の強引な侵入により先に既成事実を作つてから結婚を認めさせるという形をとり、先の権大納言と大君の場合よりは読者に緊張感を与える。ところがこの二人も結婚してしまつと、権大納言と大君同様、まことに仲睦まじい夫婦となつてまた後方に退いてしまうのである。読者は再び意表をつかれる。

中の君の結婚によって、入内の話は妹の三の君にまわって来た。

帝（冷泉院）の讓位による新帝（朱雀院）即位後の大嘗会の女御代に三の君が選ばれ、その後、関白（もとの権大納言）の養女として正式に入内し、藤壺の女御となる。そして帝寵を一身に集めるのであるが、ある春の日、宮中を散策していた新中納言（もとの三位の中將）が思いがけず女御の姿を垣間見し、たちまち心を奪われる。

こういう形で、いよいよ本物語のメインである新中納言と藤壺の女御との恋愛が語られるのであるが、すでに四巻のうち巻二の半ばを過ぎているのである。が、先の二つの恋物語にやや肩すかしを食わせられた気味の読者は、今回の恋愛に大いに期待して読み進むことになる。

さて、その後、父按察の大納言の病氣見舞のため里下りしていた女御の宮中への帰参直前に、新中納言は女御の居所に侵入し、強引に思いを遂げる。垣間見、そして侵入という設定は、先の権大納言（現関白）の場合と兄新中納言（現大將）の場合とを合わせたような趣きである。ところが、今回相手は独身の姫君ではなく帝の寵妃なのであるから、明らかに背徳行為である。あまつさえ、これによって女御は懐妊する。それを知った姉大君は、夫関白にも父按察の大納言にも隠したままで、中の君とともに女御の世話をし、秘密裡に出産させる。嬰兒は新中納言が引き取り、一条院の大宮に出自を隠して託し育てるが、新中納言の苦悩は深まるばかりで、やがて初瀬参籠中に見た靈夢に導かれて出家入山する。女御の方は立后してますます帝寵厚く、皇子と姫宮を出産する。入道した新中納言は、翌年の三月十五日、二十五の菩薩に守られて即身成仏を遂げる。こうした新中納言の悲恋のいきさつが、先の二つの恋愛譚に比べて段

違いに詳細に描かれ、またそれがより危険で破局的な恋であることが、読者をして手に汗を握らせるのである。

広沢純氏は、権大納言と大君、大將（もとの新中納言）と中の君との二つの恋愛事件は、「この物語の主流をなす権大納言と女御との関係の前提としての大きな意味での子件という事が出来る」と言われたが、確かに恋愛の成就への難度を次第に高めることによって、読者の興味をより緊張感を持って第三の恋愛譚へつないでゆく役割を先の二つの恋愛譚が担っていると考えることができよう。

ただし、これを批判して室城秀之氏が指摘されたように「そこに、物語全体から見た主題的な高まりといったものは認められない」というのも事実であり、「権大納言・権中納言（筆者注・先の新中納言のこと）・三位中將（筆者注・後の新中納言のこと）の三者の恋愛物語を、順に「このついで」のような巡り物語式に語り続けているところに、この物語の時間的特質がある」と言われるのもまた一理あると思われる。

ここで改めて注意したいのは、そもそも本物語に描かれた三つの恋愛譚は、開巻直後に紹介された美女の誉れ高い按察の大納言の三姉妹と、当代を代表する貴公子として「殿の権大納言・院の君たち」と並び称せられた三人の男君とで作られた三組のカップルの恋物語だということである。そして、思うに、この三組の恋愛を、権大納言や新中納言の恋というように男主人公を中心に捉えるのではなく、女君の方に目を向けて考えるならば、本物語は按察の大納言家の三姉妹の恋愛物語ということでは無いであらうか。室城氏が三者三様の恋愛を描いた物語の類例として「恋路ゆかしき大將」を挙げられたが、そこでは主人公たる三人の貴公子は本物語の

場合のように終始一人の女性との関係を守るわけでもなく、最終的な結婚相手も三人姉妹ではない。本物語の特徴は、三人貴公子の恋の相手が三姉妹であるという点にあるのである。

本物語に描かれた按察の大納言家の三姉妹のきょうだい愛にはまことに印象深いものがある。とりわけ権大納言(のちの関白)の北の方となった大君の妹たちに対する献身的な働きぶりは感動的である。大君は早くに生母を亡くし、継母とその腹に生まれた中の君・三の君とともに暮らしているのであるが、腹違いであるにもかかわらず、大君は二人の妹を心から愛している。妹たちも姉を慕い、物語冒頭近くで、権大納言が初めて大君と中の君の姿を垣間見た時の、中の君が病気の姉を心配して介抱しているさまなどは、とても継ぎょうだいとは思えないものがある。

新中納言(のちの大將)が中の君の居所に侵入した時、大君は継母に相談を受け、ともに善後策を考える。継母北の方の死後、三の君が入内した際も、大君は母親代わりの世話役として尽力し、また中の君も臨月となった姉のあとを受けて妹の世話をする。新中納言の密通により三の君が懐妊してしまった時にも、大君は冷静に事態を判断して適切な対応をする。三の君の秘密裡の出産の際には、中の君とともに大いに奔走する。またずっと後年、成人した不義の子に出生の秘密を告げるのは、三の君に依頼された中の君であった。このように、本物語は、強い信頼関係に結ばれて互いに支えあい助けあって、数々の困難にもたくましく対応してゆくうるわしい姉妹愛を描いた物語とも見られるのである。

ところで、この三姉妹の深いきょうだい愛と緊密な信頼関係は、大君にとつては継母、中の君と三の君にとつては実母たる按察の大

納言の二番目の北の方の人柄を拠り所にするところが大きい。前述の通り、この北の方は物語中でも最もすぐれた人格の持ち主として賞讃の的となっており、疫病のため死去した後も、長い間ことあるごとに追慕されている。この人の存在が本物語を世によくある継子いじめの物語にしなかつたばかりか、かくもうるわしい姉妹愛の物語としたのであった。また、この北の方の実弟である治部卿の律師が、とくに三の君の不義の子出産前後に大きな役割を果たすことも注意すべきであろう。

そしてさらには、この三姉妹と北の方をつなぐ人物として、按察の大納言その人の存在も極めて重要である。この人は、関白家や中宮にひたすら遠慮して、政治的野心には乏しい人物なのだが、その心遣いゆえに誰からも好感を持たれ、内大臣まで昇って栄花を築いてゆく。三人の娘を分け隔てなく愛しているが、中の君に新中納言(のちの大將)が侵入したことも、三の君に新中納言(もとの三位の中將)が密通して子を生んだことも全く知らされず、また怒りっぽい三人目の北の方をもてあますなど、いささか頼りなく、ユーモラスな面さえ持つており、まさに絵に描いたような好人物である。二人の北の方に先立たれ、自らも大病を患うなどの不幸はあるが、娘への密通事件のような物語の暗部を知らされることなく、周囲の人々に守られていちばん幸福な人生を生きたのがこの按察の大納言だということができる。

実際、本物語に登場する主要人物はすべてこの按察の大納言と関わっているのである。三人の娘の結婚によって、関白家、一条院、そして天皇家と密接につながり、長男の頭の中將は関白家に次ぐ勢力を持つ右大臣家の婿となっている。すなわち、按察の大納言家が

大勢の登場人物群の軸となつていたのであつて、本物語は、按察の大納言家とそのゆかりの人々の物語と言つてよいのである。いわばこの物語は「按察の大納言家の人びと」とでも題すべき作品なのである。いかにも大河小説にふさわしい内容だと言えよう。

按察の大納言の栄花・幸福を中心に、その娘三姉妹のきょうだい愛、およびその姻戚たる人々のさまざまな人間模様を描いたのがこの作品であつて、真に主人公といふべき人物は、実はこの按察の大納言ではないかという気がする。もちろん表面的に主人公として描かれるのは出家入道する新中納言なのであるが、作者が意図したのは按察の大納言の人々、まずはその三姉妹、そして実は按察の大納言自身の幸福な人生を描くことであつたのではないかと思うのである。そのことは本物語の大尾である巻四末尾の一節にいみじくも現れている。ここでは、先の関白左大臣（大殿）が九一歳の長寿を全うして死去したことを語り、人々のその後の昇進の状況を述べる。そして最後に触れられるのが按察の大納言、今は内大臣のことなのである。

とりどりの御ありさまを、内の大臣見奉りける。御命さへ御心のままなりけると世人も申し伝へけるとぞ。(三〇一―二頁)

こう記して三代にわたつた大河小説は幕を下ろしている。登場人物たちがそれぞれに昇進し、また結婚して幸福になつた。それを内大臣すなわち按察の大納言はすべて見届けた。この人は自分の寿命まで思い通りになつたと世人は申し伝えていふのである。作者が最も力を入れてその幸福な生涯を描こうとしたのが按察の大納言のことであつたということがこの一文ではつきりするのであろう。

ここで思い起こされるのが「落窪物語」の巻四最末尾の表現であ

る。

女御の君の御家司に和泉の守なりて、御徳いみじう見ければ、昔のあこき、今は典侍になるべし。典侍は二百まで生けるとや。女主人公のそばに仕えて終始献身的に働いた侍女あこきが、女官として最高の地位とも言ふべき典侍になり、二百歳もの長寿を保つたと伝えられているという。「落窪物語」の主人公が落窪の君と少将道頼であることは疑いないが、作者は脇役たるあこきに最大限の幸福を与えて物語を終えている。このことは「落窪物語」の作者や読者層を考える上で興味深い問題であるのだが、とにかく作者の意図として表面上の主人公とは別に思い入れを込めた隠れた主人公を設定し、その幸福を讃えて物語を締め括つていふように思えるのである。「海人の刈藻」の作者（原作者であるか改作者であるかはここでは問題にしない）も表面的には新中納言を主人公として、その悲恋と出家遁世、そして即身成仏の物語を描きながらも、実は按察の大納言を中心とするその一族の家族愛と幸福の物語を描きたかつたのであろうと思う。一見蛇足かとも思える新中納言成仏後の後日譚の物語も、按察の大納言の長寿と幸福を描くにはどうしても必要であつたと言ふべきかも知れないのである。

おわりに

はなはだ焦点の定まらない論になつてしまつたが、以上、「海人の刈藻」に関して現在持っている私見を述べてみた。

「海人の刈藻」は、「無名草子」においては、散逸した原作本に閲してではあるが、「源氏」「寝覚」「狭衣」「浜松」「今とりかへばや」に次いで多くの言葉を費して批評されており、平安末期以降に

作られた物語としては相当高い評価を得ていた作品だと考えられる。現存本はそれをかなり忠実に改作したものと見られるのであるから、もつと積極的に作品論が行なわれてよいと思う。

私としてもまだ多くの課題を残している。本物語への『源氏物語』の影響については別に論考を準備しているが、他の先行物語の影響、また後の中世物語への影響、さらには、新中納言の夢想や女御の出産場面には「とはすがたり」との関連が考えられる部分もあり、それらに關しての考察は他日を期したい。

(平成二年四月稿)

(注)

1、勅撰集歌の引用および歌番号は、以下すべて『新編国歌大観』
第一卷(昭58 角川書店)に拠る。

2、三角洋一氏「海人の刈藻」『研究資料日本古典文学』第一卷
「物語文学」(昭58 明治書院)。

3、「海人の刈藻」本文の引用は、「鎌倉時代物語集成」第一卷
(昭63 笠間書院)に拠り、私に適宜漢字を宛てるなど、表記
に手を加えた。頁数も同書に拠る。傍線・傍点は引用者。以下
同じ。

4、「あまのかるも物語」『体系物語文学史』第四卷「物語文学
の系譜Ⅱ 鎌倉物語1」(平元 有精堂)。ただし、室城氏は、「来
む世の海人となりてかづくみるめを」の部分の引歌として、『古
今集』卷一四・六八三の詠み人知らず歌「いせのあまのあさな
ゆふなにかづくてふみるめに人をあくよしもがな」を挙げてお
られるが、これは適切ではなからうと思う。

5、「あまのかるも」題名考」『二松学舎大学人文論集』第七輯
(昭49・10)。

6、「散逸物語の研究 平安・鎌倉時代編」(昭48 笠間書院)。

7、藤田徳太郎氏「鎌倉時代の物語」『国語国文』昭12・10。

8、「物語再生の方法……」海人の刈藻」の場合」『岐阜女子大学
紀要』第一八号(平元・2)。

9、「海人の刈藻」改作試論」『名古屋平安文学研究会会報』第
一三号(昭60・12)。

10、注9に同じ。

11、浅見和彦氏「しのびね物語」『研究資料日本古典文学』第一卷
「物語文学」(昭58 明治書院)。

12、「海人のかるも」『国語国文』昭11・10。

13、宮田氏が引歌として挙げられた「新拾遺集」の一首と「新統
古今集」の二首は、詠作年代が古かったり、必ずしも引歌と見
なくてもよいと思える歌であったりして、成立年代推定材料
にはされなかった。

14、「平安鎌倉時代散逸物語の研究」(昭57 ひたく書房)。

15、引用は新潮日本古典集成「無名草子」(昭51 新潮社)に拠る。
以下同じ。

16、室城秀之氏注4掲出論文。

17、注2に同じ。

18、こう考えると、本物語の題号「海人の刈藻」も、「古今集」八
〇七番歌に拠り、「我からとねをこそなかめ世をばうらみじ」と
いう、世の人を誰も恨むことはできず、ただ自分のせいで引き
起こした悲恋なのだと自責する新中納言の思いを表わしたもの

と見ることもできようかと思う。第一章で述べたこと以外に、
このような書名説も成り立つであろう。

19、注4に同じ。

20、「海人の刈藻」の特質「文学」昭10・3。

21、「あまのかるも」——特にその構成について——「平安文学研
究」第二〇輯（昭32・9）。

22、注4に同じ。

23、注4に同じ。

24、引用は新潮日本古典集成「落窪物語」昭52（新潮社）に拠る。
「典侍は」の部分、同書底本を含め多くの伝本は「てんやくの
すけは」とあるが、「典侍は」の誤写と見る通説に従う。

25、拙稿「海人の刈藻」の「源氏物語」受容（未発表）。

——大分大学教育学部講師——

〔付記〕 広島大学在学中より今日まで、終始暖かい御指導を賜
った稲賀先生の御学恩に対して、改めて厚く御礼申し上げます。